

# 歐米の家庭と子ども

吉 田 昇

私は一年ばかり、ヨーロッパ・アメリカへ行ってきた、日本に帰って約二か月になります。何かそれについて話せということですが、一般に外国にいった人が、帰って来て、その話をするのに、違う点ばかりいって同じ点を云わないといわれています。もちろん、同じ点がないわけではないのです。

私も、アメリカ・ヨーロッパの子どもと家庭の関係を私なりに見て来たことを述べますが、やはりこれは同じ点より違う点ばかりいうことになってしまふそうです。欧米の本当の姿とはかけはなれたものになるかもしれませんが、私は、私なりに印象を話したいと思えます。

欧米の家庭も一軒一軒違ふし、国によって、職業・地位などの社会的条件によっても違い一概には云えません。私のいたのはアメリカが主ですが、ときどきヨーロッパについてもはなします。

日本と比較してアメリカで、違って感じることは、まず家という

ものの違いです。人間の数が日本より少く、統計によるとアメリカは平均家族数が三・一人、日本は五・一人です。三・一人という夫婦と子どもが一人ということになります。また家の構造が違い、基本になるものは個人の部屋で、個人の部屋には鍵があり、いつも鍵を持っています。部屋の外でドアを閉めると自然に鍵のかかる

ドアがあつて、それで、知らない旅行者は失敗します。もしそういうことになったら *Ikpu ny key in ny room* というのださうです。ある人は、部屋の外にでると鍵がしまつてしまつたので、試行錯誤法でいこうと思ひ、廊下をよく調べると、もう一つドアがありました。それをあけてみると階段に出ました。それを登っていくと

またドアに出ました。それを開けて屋上に出てその戸を閉めると、今度ははいれなくなつて非常梯子で降りたという話まであります。そういう「鍵」が生活の中心となつていきます。家の構造は個室にわ

かれていて、子どもが二人あれば一人一人が部屋を持ち、夫婦の部

屋もあります。個室を持つということが人間の成長に関係があり、子どもの成長に関係があります。

アメリカのような個人主義の国では、自分自身で自分のことを処理します。日本と違うのは、家と家との間に垣根がないことです。廊下と往來が続いているのです。個人の部屋が表からしゃ断されて

いて、居間は外へ続いているので、居間から出ればたとえ家の中でも、ある意味で公共の場所なので、部屋の中だけが、どんな服装をしても良いところなのです。日本とアメリカの人間の生活の違いは、個室があるということ、垣根がないということで、そういう家の中で高度の施設・設備を持って、高い程度の生活をしていきます。

アメリカでは国民所得が、日本が一人七万円に対してアメリカが七十一万円。つまり日本の十倍です。スエーデンではだいたい六倍、イギリスが約四倍半、フランスも四倍半、ドイツが四倍です。欧米では、家庭の道具はかなり揃っているのです。たとえば自動車について申しますと、アメリカでは“One Car Family”といつて一台しか持っていないのは貧乏ということ、たいてい二・三台は持っているのです。自動車は非常に安く、私の持っていたカメラより安い自動車にたびたび乗りました。二十五ドル、日本のお金で三万八千円の自動車もあります。それでも動いているのです。車

い湯もなく、風呂もなく、ところによっては、電気もないところもあります。一般的にいわれることは、日本よりは高度の生活をしていて、そのなかで個人というものが尊重されるということです。個人がはつきりしていることはことばにおいてもみられます。小さな子どもでも「おかあさんは外出している」というのにも「彼女は外出している」といいます。私と彼も区別されます。全て主語をつけ、私は――。私は――。といえます。人間の数が少ないので、人間の力がかなり高く評価されます。人を待たせる、仕事の時間を長くする、人の手をかりる、ということは大変高い価値を持っていきます。もっとも、アメリカの農村では、この頃、子どもを多く欲しいという人がふえています。私の行ったある農村では十一人の女の子がいて、最近男の子が加わって一ダースもの子どもがいるところもあります。しかし、これは例外で、いっぽんには子どもが少いし、子どもひとりひとりとは独立の個人と見なされています。したがって年をとった人でもよく働きます。若い人に世話になるのは不本意ですし、またよく世話をしてくれないからです。暇だから年をとった人は働かずにいます。働き口のない人は公園のベンチに腰かけています。これは日本ではあまりみられません。そういう時、一緒に住みたくないのですか」と聞くと、一緒にすみたいが、私が外にいる方が子どもが楽しく暮せます」というのです。

が家があり、電機冷蔵庫、テレビ、もちろん電機洗濯機もありドライヤールもあります。アメリカでもテネシーの貧乏な農家には、暖か

また家庭の主婦についてみますと、教養の程度が日本より高いのです。大学を出たおきさんもたくさんいます。数字で具体的にいい

ますと、大学へ行く人の全体の数は日本の五倍、大学生のなかで女性の占める割合は、日本が短期大学を含めて二一％なのに、アメリカでは三五％です。日本の五倍の数があつて、しかも大学へいく人の割合が多い。人口は一・五倍ですが、結果において七倍ぐらいが大学へ行くのです。ヨーロッパでも日本より高く、イギリスでは、大学へ行く婦人は、男で大学へいく人の二十七％です。その上家庭のなかでも本を読む人が多いことです。機械があり設備があるのでも、洗濯や買物に時間をとられないのでしよう。労働省の調べでは、日本の主婦は一日四十七分を買物に使つています。アメリカでは、買物は自動車でいきデパートなどで、一週あるいは一月分の買物をして、必要なものは冷蔵庫に置いて置くのです。お掃除でも機械があつて時間がかからないのです。だから本を読むひまがあつて、アメリカで本を購読するのは男の人よりも女の人に多いのです。実際の知識も主人は専門のことは良く知つていますが、一般のことは奥さんの方がずっとよく知つています。それは家についてテレビを見たり、ラジオを聞いたりする機会が多いからです。

またこのようなことから婦人の社交活動が活潑で、婦人でクラブに入っていない人は統計上からみても、ほとんどいません。多くの人があるかのクラブに入り、電話をかけてすぐ集めるのです。家庭の主婦でも成人教育へ出席する人が多く、私がサンフランシスコのマリーナー・ハイスクールでみた成人教育は、若い人だけが勉強するのでなく、年取つた人々が主になつて勉強していました。私が行つ

たときは、裸婦を前にして写生をしているグループもあり、スペイン語を勉強しているグループもありました。その大部分が主婦なのです。また働きに出る主婦も非常に多いのです。日本の場合も非常に多くの人が働いています。女の人は恐らく欧米より多く働いていると思います。統計によると全労働人口の四〇％が働いています。

ただ日本と欧米とでは働き方が違うのです。日本では、農業・商業とかの自家営業の手伝いが多いのです。草取りをしたり、田植えをしたり、店頭に出て小売りをするという形の働き方が多いのです。日本の統計によると家族従業員が六〇％になつています。アメリカでは全労働人口の二七％が婦人でその八八・四％が非農業者となつています。またスエーデンの働く婦人が、工業が二七・八％、商業が二七％、一般的事務が二二％、家事従業員が一二％、農業が七％の割合になつています。家族の中で働いていると、自分は働き人であるという意識よりも、手伝をしているという感じになつてしまします。

欧米において、婦人が働きに出る場合、日本のように腰掛的に、自分のドレスを作るために働き、すぐやめる、というようなことは少ないのです。働く人の平均年齢は、日本よりヨーロッパの方が高いのです。アメリカでは、ドラック・ストアーというのがあり、そこは軽い食事をするところですが、朝から男がいっぱいいます。つまり朝飯を作らない奥さんが多いのです。家庭の三〇％が朝飯をつくらないので食堂がこむのです。また夫婦で働いているのに、日曜は

店が閉まっているということから通信売買が発達していますが、こんなところにも主婦が仕事をもっている実態が伺われます。

もう一つ日本と違うことは、結婚年齢の低下ということですが、一九五五年のアメリカの結婚年齢の平均は男が二・七歳、女が二・〇二歳。これを一九九〇年に比べると非常な開きがあります。すなわち一九九〇年には男が二・六歳、女が二・二歳でした。また現在イギリスの結婚平均年齢は、男二三歳、女二一歳です。どうしてこのように結婚年齢が低下したかという点、アメリカの場合、日本のようにお見合結婚はありません。自分で探すので、同級生が多くなるのです。また、男が女を食べさせるという観念がないということも一つの理由でしょう。私がシカゴに行った時、日本のしきたりに従って隣の部屋に挨拶にいきました。そして、「明日からは会えないかもしれない」というと、その人は変な顔をして、明日からは会えないかもしれない、「どうしてか」と聞くと、「自分は働いているから」という。だんだんわかってきたのは、その男には、ガール・フレンドがいて、はじめは同級だったのですが、ガール・フレンドの方は、二年程上の学年になっているのに、彼の方は働いているためにずっと原級にとどまっているらしいのです。男が働き、女が勉強しているのです。いわゆる苦学生かと思つて生活をみると、部屋の中にはL・Pレコード・ハイファイのラジオ・カラー映写機等など、ぜいたく品を持っています。約一年すると女が卒業するから、そうしたらこんどは結婚して奥さん働いてもらつて自分が進級するというのです。イギリ

スでもアメリカでも非常に若い奥さんが多くいます。イギリスで三分の一の花嫁は二〇歳以下ということになります。だから十六歳の花嫁もいるわけです。こういうことに関係があるかないかは知りませんが、離婚もかなり多いのです。イギリスは国柄からいって離婚を禁じているので少ないのです。日本は、一〇〇〇人に対して〇・八四件で、イギリスは〇・六件です。しかし、アメリカの方は二・四件となっています。アメリカでは、日本のように離婚すると世間が悪いというふうなことはないのです、平気で人前で話します。以上が家庭のりんかくで、この中で、子どもが育つのです。

このようなことから考えられる日本と欧米との違ふ点は、第一に自分のはつきりしていることです。子どもの時から私と彼とがはつきりしています。遠足の場合などでも彼はこう考えるが、私はこう思うというのがはつきりしている。人が行くのなら自分もいく、というのではない。家の中でも一人一人が、一人前の人間なのです。ですからお客様がきた時、まっさきに子どもにいたるまで紹介します。その紹介の仕方「これが家のものです」などというのではなく、その人の名前をあげて一人一人を紹介します。もちろん一人一人が意見を持っており、家の中でも話し合いがあり、その結果まとまるのです。理屈が家の中でも通ります。日本の場合のように理屈はよそ行きのものだという感じはありません。日本では門を入り、根根を通ると家の中で、外で理屈を云つても、家の中ではまあまあというのがあります。したがって欧米では、理屈が生活の中で生き

ているということが、日本と違うところです。

第二に 能率 Efficiency が家の中にもあるということです。子どもを叱るにも日本のように「何々してはいけません」というのではなく、「そういうことをすると、お母さんの手が多くかかる」という風に云います。もちろん家庭の礼儀作法はかなりやかましく、食事の時間に遅れないようにというのはあります。これもしきたりとしてではなく、お母さんの手を二度使わないということと関係があります。日本は、食事におくれないように、というのは作法として考えて、おくれないようにと叱るのです。要するに能率がいろいろのことについて考えられています。日本のように世間ではありません。日本では、お客様が来ると、家の中のこととはさておいて、みえで御馳走をします。アメリカでは、ごちそうするにも家に前に買ってあったハムがあったから出すといった具合にします。アメリカでは家の中の能率がお客様のところへ出てくる能率です。日本のようにわけのわからないのではなく、子どもにもわけのわかる能率なのです。

第三番目は、家庭の中に余暇生活が多いということです。日本では、とくにアメリカから帰ってきて気がつくことは、夫婦間の会話が少ないということです。先日若い夫婦が来て話したのですが、主人は勤め先で映画をみた、主婦は買物先で映画を見た。これが私の家で話しているうちに、お互に同じ映画を見たことを知った、というわけです。私は、夫婦というものは、良く話し合うものだと思います。

ます。日本では、家の中で生活を楽しむことに非常な無理があります。家の中の会話の量を比べてみますと日本よりアメリカの方がずっと多いのです。ことに親同志の愛情の表現が会話の中に出て来る。そういう中で、子どもはガールフレンドから手紙をもらった、どういふ表現をするか、親の話の中から知り、親も手紙の内容をもっとうまい表現はないかと一緒にみるようなことまであります。

遊ぶことが悪いという意識はない。私がなぜこういふことを云うかという点、日本と対比して考えているからです。日本は家の中にそういう生活がないので子どもがヨーロッパ・アメリカと比べて違う立場にある。日本の子どもは、何か競馬の馬のようなものだということができる。奥さんは、非常に能率が悪く、おいしいものを作っても皆何んともいってくれず、まずいものを作ると、文句をいわれる、そこで期待を全て子どもにかけます。奥さんは馬券を買った主人のようなもので、そのかけた子どもについては、学芸会の場合も自分が出るのでなく、その子どもが出るのに親の方が大さわざをします。それは、入学試験にもみられます。もし馬に自殺することができたら、競馬の馬には自殺が多いでしょうが、日本では青少年の自殺が多い。アメリカにはそういうことはきわめて少ないと思います。お母さん自身が社交の場を持ち、夫婦でも話し会えるから子どもに期待をかけないのです。女の子がボーイフレンドから手紙をもらってもひがんだりしないで一緒に考えて、自分の経験話を話し、最もうまい内容を考えてあげます。私のあった二人は、自

分の若い頃のことを子どもに話して聞せていました。私は大変良い話だと思いました。あれなら作文の能力・表現の能力がうまくなると思います。私は日本の学校教育の国語能力はアメリカに比べ劣っているとは思いませんが表現能力がない、そういう点で日本は劣っていると思います。

次の事柄は青少年犯罪の問題であります。これは、アメリカの家庭で大きな問題です。一〇〇万人の青少年犯罪があるといわれます。私も昨年の夏少年感化院にとまって観察しました。そこで母子の手紙のやりとりしたのを見せてもらいましたが、日本と違う点は、子どものことを全く考えない母親がいることです。親が何度も離婚したような人の子どもへの手紙は、「元気で暮していますか。この間行けなかったのは、誕生日を忘れてしまったのです。誕生日を知らせてください。」といった他人にあてたような手紙です。家庭において個人・個人が非常に明瞭なために、愛情の欠損が起ったときには全く一人になってしまいます。青少年犯罪の七〇%が欠損家庭です。この点は、日本とアメリカの大きな違いだと思います。

日本には酔っぱらいが多い。抑圧されているので酔っぱらうのです。皆で酒を飲み、歌ったり話したりしたがるのです。日常生活がうまく行かないので酒でごまかすのです。本当に酔っているのではないのです。だから落語にあるように、道を酔って歩いて、交番の前ではちゃんと歩くといったようなことがあります。アメリカには酔っぱらいは見たくても見られません。その代りアルコール中毒

が多いのです。バーにいても、日本のようにおつまみはありません。だまってひたすら飲んでいきます。アメリカには、アルコール中毒は多く、酔っぱらいは少ないのです。日本はその逆です。日本は慣れ合いすぎ、まあまあですごしてしまいます。そして議論したいのにだまっている、歌を歌いたいのに歌わない。だから発散は酔ってする。その場所も雰囲気にしても慣れ合い人間関係的なものがあります。

幼児の教育を考えると、小学校の場合にも同様ですが、日本とアメリカの子どもは、それぞれ違う環境で育つということです。自分の責任・能率などを教えるのに、どういう環境で子どもが育っているかを考えねばなりません。そして幼児教育は楽しいものを与えらることで、与える時、よそいきのものでなく家の中では違うといったものでないようになければなりません。しっかりした能率の上において、しかも与えるべきものは与えねばなりません。日本には日本の社会があります。アメリカのものをそのまま教えるわけにはいきません。日本とアメリカでは非常に違った生活をしているからです。学校でだけ、そういう教育をしても、家庭では違っていて、よそいきのものと子どもに考えさせるようなことではいけない。だから母親と話し合って家庭でも愛情をもちながら、その愛情がゆがまないような生活をするようにすすめたいものと思います。

以上私がみてきた印象をまとめてみました。

(お茶の水女子大学助教)